



A-PLAT

気候変動適応情報プラットフォーム
CLIMATE CHANGE ADAPTATION INFORMATION PLATFORM

資料 2

令和 6 年度「気候変動適応の研究会」の活動報告 および今後の活動方針

2025年2月13日
国立環境研究所 気候変動適応センター

気候変動適応の研究会のあゆみ（R2～R6年度）

| 1

年度	内容	参加者	形式
令和2	<ul style="list-style-type: none">国研21機関による気候変動適応に係る最新の研究・取組動向の発表	<ul style="list-style-type: none">国研21機関	オンライン
令和3	<ul style="list-style-type: none">国研21機関による最新の研究・取組動向の発表アンケート結果や意見交換会を踏まえた、6テーマでのWG設立についての議論	<ul style="list-style-type: none">国研21機関LCCAC10機関程度	オンライン
令和4	<ul style="list-style-type: none">国研21機関による最新の研究・取組動向の発表テーマごと（6分科会）に参加者間での情報交換や連携の可能性等の議論を実施	<ul style="list-style-type: none">国研21機関自治体・LCCAC20機関程度	現地開催（つくば）とオンラインのハイブリッド
令和5	<ul style="list-style-type: none">国研21機関による最新の研究・取組動向の発表テーマごと（6分科会）に参加者間での情報交換や連携の可能性等の議論を実施	<ul style="list-style-type: none">国研21機関自治体・LCCAC30機関程度	現地開催（東京）
令和6	<ul style="list-style-type: none">国研21機関による最新の研究・取組動向の発表新編成の分科会（6分科会→4分科会）による活動を開始	<ul style="list-style-type: none">国研21機関自治体・LCCAC35機関程度	現地開催（東京）

令和6年7月25日 実務者会合（オンライン）

- 研究会および各分科会の活動方法・運営方法等に関する意見交換を実施
- 令和6年度研究発表会・分科会の開催方法についての開催方法を合意

令和6年12月17日 研究発表会・分科会（@航空会館）

- 研究発表会：各構成機関による最新の研究動向やトピックに関する解説を実施
- 分科会：分野別的情報交換や連携・協働の可能性等を議論
 - 参加者事後アンケートにて今後の企画・運営に関するご意見等を聴取

地域での気候変動適応の実践（いわゆる社会実装）を念頭に置いた

- 国研とLCCACの対話・共創・交流

- ⇒ 地域の現場における課題感の共有と解決に向けた意見交換
- ⇒ 最新の科学的知見の活用に向けた情報交換
- ⇒ 両者のニーズ・シーズのマッチングによる新たな協働の模索

- 国研どうしの対話・共創・交流

- ⇒ 各機関の取組を共有し、あらゆる形での連携や協働の可能性を模索
(将来的な可能性：共同研究の立ち上げ、外部競争的研究費の獲得)

令和6年度 研究発表会・分科会の開催概要

| 4

日時 : 令和6年12月17日（火）9:40～18:00

開催形式 : **対面**（航空会館）

参加者 : **計150名程度**（研究機関、LCCAC、地方公共団体、関係省庁、大学など）

プログラム概要 :

9:40-9:45		開会、趣旨説明
9:50-12:20	150分	研究発表会（3会場、計18講演）
12:30-13:50	80分	写真撮影、ランチタイムミーティング
14:00-15:20	80分	暑熱・健康・都市分科会
		農林水産業分科会
15:30-16:50	80分	NbSと気候変動適応分科会
		気候データ・シナリオ分科会
17:00-18:00	60分	総会：分科会報告および今後の研究会活動についての議論
18:00		閉会
-20:00頃		交流会（会場内）



研究発表会開催概要

* 発表15分、質疑10分

* 講演資料など（研究会A-PLAT特設ページ）

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/archive/conference/2024/1217/index.html>

| 5

701会場	702会場	703会場
温暖化レベルに伴う影響度・適応効果の定量的評価（主に農作物を対象として） 西森 基貴（農研機構）	気候変動適応へのJAXA衛星観測情報利用 沖 理子（宇宙航空研究開発機構）	水道における気候変動の影響と対策 小坂 浩司（国立保健医療科学院）
気候変動適応型作物の創出技術の開発および活用 関 原明（理学研究所）	気候変動適応に関連するNICTの取組 佐藤 知紘（情報通信研究機構）	過去40年程度の発生・流出流木量の経年的な変化傾向 秋田 寛己（防災科学技術研究所）
森林生態系、林業分野における気候変動の影響予測および適応策の動向 中尾 勝洋（森林総合研究所）	従来型観測を用いた日本域長期領域再解析RRJ-Convの紹介 福井 真（気象研究所）	インフラ分野における衛星活用リモセン技術の社会実装に向けた検討状況 吉田 邦伸（国土技術政策総合研究所）
水産分野における気候変動影響の地域差と適応策 木所 英昭（水産研究・教育機構）	地域気候サービスのための生成AI基盤モデル開発に向けた取り組み 松岡 大祐（海洋研究開発機構）	都市・時間別の暑熱環境予測に基づく将来のスポーツ活動における適応策の検討 大山 剛弘（国立環境研究所）
全国の海草・海藻藻場の分布・CO2吸収量の推定 茂木 博匡（港湾空港技術研究所）	気候変動適応に貢献する北極域データアーカイブシステム 矢吹 裕伯（国立極地研究所）	温熱シミュレータによる暑さ対策の評価 足永 靖信（建築研究所）
気候変動適応に関する欧州（EU）の取り組みと進捗状況 中村 亮二（科学技術振興機構）	インドネシアとフィリピンの河川流域を対象としたd4PDFダウンスケーリング 牛山 朋來（土木研究所）	大規模アンサンブル気候予測データベース（d4PDF）を利用した将来の自治体レベルの暑熱環境 中島 虹（産業技術総合研究所）

- 4つの分科会を編成。国研研究者・LCCAC担当者等がそれぞれ希望する分科会に所属（複数可）。
- オンライン勉強会等を適宜開催し、12月には対面形式での会合を実施。

※敬称略

気候データシナリオ分科会 座長：足立（理研）、仲江川（気象研）	農林水産業分科会 座長：長谷川（農研機構）
<p>■目的 気候予測データ開発者と利用者（国研の影響評価研究者ならびに地域気候変動適応センターの担当者）の双方向的な対話を試行・実現させる。</p> <p>■今年度の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気候予測データセットの利活用に関するアンケートの実施。 ・「次期気候予測データセットがやってくる！」の開催。 (R6 10/10) @オンライン 	<p>■目的 農業・林業・水産業分野の専門家が集結する機会を活かし、互いの接点に気付き、適応に関する新たな切り口や研究連携について考える。</p> <p>■今年度の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「気象予報技術と農林水産業分野での影響評価」の開催。 (R6 11/1) @オンライン
NbSと気候変動分科会 座長：西廣（国環研）	暑熱・健康・都市分科会 座長：高根（産総研）
<p>■目的 自然の機能を活用した気候変動適応の取組および関連研究について情報共有し、特定の地域での共同研究や統合モデルの構築に向け、連携を強化する。</p> <p>■今年度の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「気候変動への適応に役立つ自然の活用事例集」の作成準備。 ・遊砂地建設現場（宮城県内）の視察。 (R6 11/6) 	<p>■目的 気候変動の影響で脅かされる人々の暮らしや安全について、最新の研究成果の共有や対話を通じ、地域での実装に結び付ける。</p> <p>■今年度の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「気候変動適応セミナー『熱中症対策』」の開催。 (7/22) @オンライン

1・分科会活動の背景・目的

- 気候予測の専門家は最新の技術を駆使して「気候予測データセット」を開発しているが、地域気候変動適応センター（LCCAC）での行政上の意思決定や、各國研での気候変動影響評価の研究において、どのようにデータセットが利用されているのかよく把握できているわけではない。
- データセット開発と意思決定・研究の現場との間では、ニーズの認識についてズレがあるかもしれない。この事態の解消のため、データ開発者と利用者間の定期的、かつ双方向的な対話は不可欠。
⇒気候予測データ開発者と利用者の双方向的な対話の実現に向けて試行を行う。

2. 今期（令和6～7年度）のテーマ

- A) （利活用のための）気候データ・シナリオに関するデータ利用者側の理解の促進
- B) 気候データ・シナリオのユーザーニーズに関するデータ提供者側の理解の促進
- C) 地域における気候データ・シナリオの利活用の成功例と苦労話の共有

令和6年度の活動

- ① LCCACを対象とした、気候予測データの利活用に関するアンケートの実施（令和6年8-9月）
- ② 分科会「次期気候予測データセット（仮）がやってくる！」の開催（令和6年10月10日）
- ③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）
 - ・事例紹介：鈴木 啓明 氏（北海道立総合研究機構）
 - ・座談会：データ利活用の現状・活用事例を踏まえた意見交換

* 分科会はクローズドで実施中（資料公開なし）

分科会の開催概要 【気候データ・シナリオ分科会②】

| 8

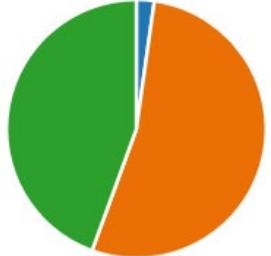
① 気候予測データの利活用に関するアンケート (令和6年8月～9月) ※LCCAC対象

② 分科会「次期気候予測データセット（仮）がやってくる！」 (令和6年10月10日) ※参加：国研/LCCAC 計60名程度

Q.気候予測データセット2022について

- 使ったことがある
- 名前だけ知っている
- 知らない

1
24
20



Q.気候予測データセット2022を使っていない理由は？【複数回答可】

- 時間がない
- 使い方が分からない
- その他

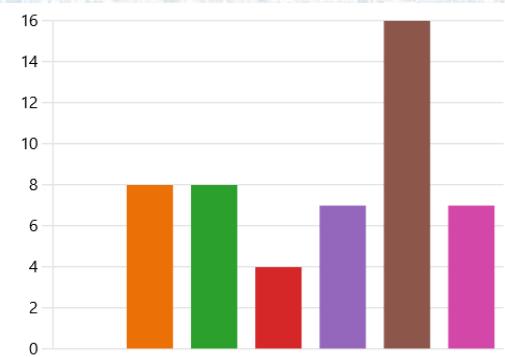
13
28
13



Q.普段の業務での気候予測関連情報の取得元【複数回答可】

- DIASから
- A-PLAT Proから
- A-PLAT WebGISから
- データを開発した研究者・研究所から
- 分からぬ
- 取得したことがない
- その他

0
8
8
4
7
16
7



■プログラム

※プログラムは予告なく変更となる可能性がございます。

No.	時間	講演内容	登壇者（敬称略）
1	13:00	開会挨拶・趣旨説明	気象研究所 仲江川敏之
<勉強会>			
2	13:10	気候予測データセット 2022 の利用について	海洋研究開発機構 石川洋一
3	13:30	次期気候予測データセットの仕様	気象研究所 辻野博之
4	13:50	力学的ダウンスケーリングを利用したアンサンブル気候予測データセットの作成と量的イベント・アトリビューション	気象研究所 川瀬宏明
5	14:10	バイアス補正の必要性と注意点	国立環境研究所 石崎紀子
14:30 休憩			
<意見交換会>			
6	14:40	気候データの利活用に関するアンケートの結果共有 およびブレイカウトセッションの進め方	国立環境研究所
7	14:50	ブレイカウトセッション 1 (10 分) 勉強会の講演内容の理解を深めよう！	
8	15:05	ブレイカウトセッション 2 (20 分) 次期気候予測データセットをどのような影響評価研究や適応施策に活かすか？	
9	15:30	各グループの議論内容の発表	講師 4 名
10	15:50	閉会挨拶・総評	理化学研究所 足立幸穂 気象研究所 仲江川敏之

事務局：国立環境研究所 気候変動適応センター

参加者の主な意見

- 異動のあるLCCAC担当者でも使い易い形でのデータ提供が理想。
- 一般市民に対するデータの見せ方が難しい。
- 地域（都道府県など）によってメッシュサイズのニーズが異なる。
- 近未来予測と長期予測の用途の違いを知りたい。など

③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）

プログラム（80分）

1. 趣旨説明
2. 今年度前半の活動の振り返り
3. 令和6年度分科会

「地域における気候データ・シナリオの利活用の成功例と苦労話の共有」

1) 事例紹介（15分）

「道総研エネルギー・環境・地質研究所における気候予測データの活用」

鈴木 啓明 氏（北海道立総合研究機構）

2) 座談会（30分）

4. まとめ

参加者

国研・大学等：31名
LCCAC：21名
関係省庁：7名



座談会の様子

参加者からの主な意見

- 自らDIASからデータをダウンロードし、加工した上で配布するシステムを作ることができるような自治体がある一方、異動して初めて気候予測の話に触れるという担当者がいるなど、**LCCACにも技術的な面での幅があることには留意すべき。**
- 本庁と地方環境研究所等では求めるデータが異なる**（例：本庁は広報のために将来の猛暑日数などを知りたい）。
- LCCACが**自ら必要な指標を加工・解析できるようになるための技術支援**を国環研などに期待している。
- 気候予測から影響評価・適応までの流れを考えるには、研究者や実務者が集まるこのような機会が非常に重要。
- 現場では目先の近未来予測のニーズが高い。**100年後などの長期スパンの話は国として取り組まなければならない。

1. 分科会活動の背景・目的

- 既存事業等との重複は避けるべき。「研究会」という場だからこそできる取組を実施したい。
- 水産業分野が統合された1年目。まずはお互いの接点に気付き、適応に関する新たな切り口や研究連携について考えることを目指す。

2. 令和6年度の活動

- ① オンライン分科会「気象予報技術と農林水産業分野での影響評価」（令和6年11月1日）
- ② LCCACを対象としたアンケート、ニーズ調査
- ③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）
 - ・事例紹介

畠山 重文氏（JAきたみらい東京事務所）

志村 浩雄氏（福島県農業総合センター果樹研究所）

濱岡 秀樹氏（新潟県水産海洋研究所）

- ・座談会：専門ごとにフリーディスカッション

分科会の開催概要 【農林水産業分科会②】

| 11

① オンライン分科会「気象予報技術と農林水産業分野での影響評価」(令和6年11月1日) ※主に研究者向け

■プログラム

※プログラムや登壇者は予告なく変更となる可能性がございます。

No.	時間	講演内容	登壇者・講師（予定）
1	13:00	開会挨拶、趣旨説明 ＜研究紹介＞	長谷川座長
2	13:05	2024年夏の季節予報について	気象庁 大気海洋部 野津原昭二 氏
3	13:35	温暖化でダイズの莢先熟（青立ち）は増えるのか？ 育種データを基にした原因分析と将来予測	農研機構 農業環境研究部門 熊谷悦史 氏
4	14:05	果樹の適地移動について	農研機構 果樹茶業研究部門 杉浦俊彦 氏
5	14:35	北日本における藻場生態系の将来予測と適応策	水産研究・教育機構 水産技術研究所 環境・応用部門 須藤健二 氏
	15:05	休憩 ＜意見交換＞	
6	15:10	意見交換の進め方について	国立環境研究所
7	15:15	意見交換 テーマ（仮）：影響評価・適応研究の手法の比較-他分野でも応用可能な手法-	
8	15:50	まとめ・座長コメント	長谷川座長
9	16:00	閉会	

目的

- 農林水産業分野の多岐にわたる専門家が交流し、異分野の研究にも触れる機会とする。
- 非公開形式とすることで、最新（未発表）の研究成果やトピックを知る機会とする。

議論内容・意見など

- 季節予報の技術は近年格段に向上している。この成果をもっと活用していくべき。
- 長期の影響予測については、これまでにもデータ提供側と利用側が一堂に会した議論の場があったが、**季節予報の利用**に関してはおそらくここがスタート。対話を続け、共通認識を持つことが大切。
- 解像度は粗くても良いので、**海面水温の予報は半年先**くらいまで分かると、養殖業への活用が大いに期待できる。
- 果樹の適地移動**と同様に、養殖業も移設が重要。流通経路の変化など、果樹での適応事例を参考にしたい。
- 水や栄養塩の循環**も含めた広い視野で適応を考えることで、分野横断型の新しい研究の芽が育つかもしれない。

分科会の開催概要 【農林水産業分科会③】

12

② LCCACを対象としたアンケート、ニーズ調査（令和6年11月）※LCCAC対象

Q1. 地域の適応計画内に記載された品目について、すでに表れている影響や被害は？

	対象品目	すでに現れている影響・被害など	不足しているデータ
穀物	コメ	品質・収量低下 白未熟粒・胴割れ粒の発生	・被害の具体的なデータ（農作物全般）
果樹	ミカン、リンゴ、カキ、ブドウ、日本ナシ	収量低下、成熟遅延、成熟期の早期化（モモ・ナシ） 日焼け果、果肉障害、 カメムシ食害、露地栽培への高温や収穫前の降雨による影響 着色不良（ブドウ）	・農作物（コメ、リンゴ、ブドウ）は品種による影響の違いを考慮するためのデータ ・精度の高い気象データ（凍霜害発生時期は、詳細な予測情報の提供が望まれる。）
熱帯性作物	パインアップル	収穫時期の変化（2021年は20日早まった）	
林業、林産物	マツタケ、キノコ原木、マツ	地温の上昇による影響（マツタケ）松くい虫の被害の拡大	
茶		品質低下	
野菜類	レタス、水ナス	抽だい（レタス） つや無し果（ナス）	
藻場		磯焼け	
水産物	サケ、イカナゴ、アワビ	不漁、海水温上昇による禁漁 藻場の衰退による水揚げ減少（アワビ類）	・海洋環境や魚種変動のデータ ・海水温や栄養塩、プランクトン量などの浅海域を含めた広域的な海洋データ
養殖漁業	ワカメ	養殖収量の不安定化	
内水面漁場	ワカサギ、イワナ	水温上昇による産卵時期や分布への影響	

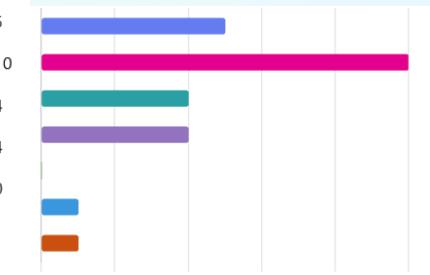
② LCCACを対象としたアンケート、ニーズ調査 (令和6年11月) ※LCCAC対象

Q 2. それらの品目の影響評価や適応策の検討のために必要な情報は？

【期間】

～2030年の近未来予測

- 向こう一年の季節予報
- ～2030年
- 2030年～2045年
- 2040年～2060年
- 2080年～2100年
- 2030年～2100年（全期間）
- その他



【空間解像度】

100m単位、1km単位

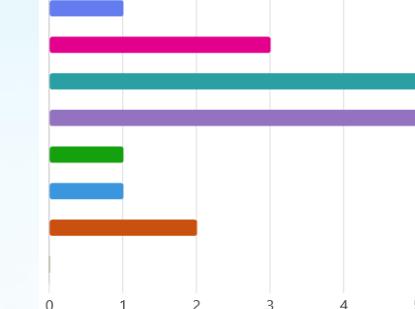
- 100m単位
- 1km単位
- 5km単位
- 町丁目単位
- 市区町村単位
- 都道府県単位
- 農地の区画情報（筆ポリゴン※）※農地の区画情報
- 報（筆ポリゴン）のデータ提供・利用（農林水産省）...
- その他



【時間解像度】

1日単位、月単位

- 分単位
- 時間単位
- 1日単位
- 月単位
- 3か月単位
- 6か月単位
- 年単位
- その他



Q 3. 農林水産業分野に関する研究者への要望・相談事項など

- 具体的な影響評価の方法について詳しく教えて欲しい。
- LCCAC担当者向けの講習会等を開催して欲しい。
- 各種データへのアクセス方法やダウンロード方法の簡素化を検討して欲しい。
- 春先の遅霜による果樹への影響の調査方法や評価方法などを教えて欲しい。 など

③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）

プログラム（80分）

1. 趣旨説明
2. 話題提供

畠山 重文氏 (JAきたみらい東京事務所)

志村 浩雄氏 (福島県農業総合センター果樹研究所)

濱岡 秀樹氏 (新潟県水産海洋研究所)

3. アンケート結果共有
4. 座談会
5. まとめ

参加者

国研・大学等：32名
LCCAC：20名
関係省庁：9名



座談会の様子

議論内容・参加者からの意見など

- データの使い方などの方法論だけでなく、影響評価や適応の具体的な方法をもっと詳しく知りたいという要望が多かった。今後はもう少しポイントを絞った議論を取り入れても役立ちそうな印象。
- データの共有は大切。LCCACから気象データを農林部門に提供するパターンもあり得る。
- 優良農家は経験値農業でも成果を上げているが（すでに適応策を実践している）、これからの生産現場ではデータに基づく農業にも取り組んでいただく必要がある。
- 果樹では影響に対し適応策が追いついていない印象。費用対効果の良い対策が早急に必要である。品種を転換する場合には、行政も加わり、地域一体でブランド化するような取組に期待。

1. 分科会活動の背景・目的

- 自然の機能を活用した気候変動適応策の実現には、分野横断・省庁横断的な取組が必要。
- 自然の機能を活用した気候変動適応の取組（副次的に適応につながる取組を含む）および関連研究について情報共有する。
- 特定の地域での共同研究や統合モデルの構築に向け、連携を強化する。

2. 令和6年度の活動

- ① 「気候変動への適応に役立つ自然の活用事例集（仮称）」の作成に向けた情報収集
- ② 外部研究チームとの合同勉強会・現地視察会（宮城県五福谷川など）への参加・交流
- ③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）
 - 研究紹介
浜田 崇氏（信州LCCAC）
横山 智子氏（千葉県LCCAC）
横山 仁氏（防災科学技術研究所）
 - ディスカッション

* 分科会はクローズドで実施中（資料公開なし）

① 「気候変動への適応に役立つ自然の活用事例集（仮称）」の作成に向けた情報収集

目的

自然の機能を活用した気候変動適応の取組事例および関連研究情報の共有

作業方針

- 既存の関連資料も参照しつつ、研究機関連携の取組ならではの視点も加えて情報収集・整理を行う。
- 解説パンフレットやデータベースとしての公表を検討する。

実施体制

実行チーム※で方針を話し合い、研究機関連携やLCCACとの連携を通じて情報収集・整理を進める。

収集項目

事例名称、事例の種別（実証・研究/実践/情報基盤）、概要（100-300字）、気候変動適応への効果が期待される分野、気候変動適応以外の効果/キーワード、事例の主体、出典

⇒ **計65事例** (R6.12時点)

⇒ 精査、公表に向けた見せ方（メインユーザー、公表形態など）の検討へ

② 外部研究チームとの合同勉強会・現地視察会への参加

森林総研をはじめとする実行チームメンバーと、大学研究者・民間企業等の参加する外部研究チームとの合同企画。双方からの研究紹介ほか、遊砂地建設現場の巡検および意見交換を行った。※詳細非公開

③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）

議論内容

研究紹介

浜田 崇氏（信州LCCAC）、横山 智子氏（千葉県LCCAC）、横山 仁氏（防災科学技術研究所）

参加者

国研・大学等：34名
LCCAC：34名
関係省庁：5名

- NbS（自然を活用した課題解決）、EbA（気候変動適応を目的としたNbS）の概念が共有された。
- NbSおよびEbAの社会実装における課題とその解決策

＜主要な課題＞

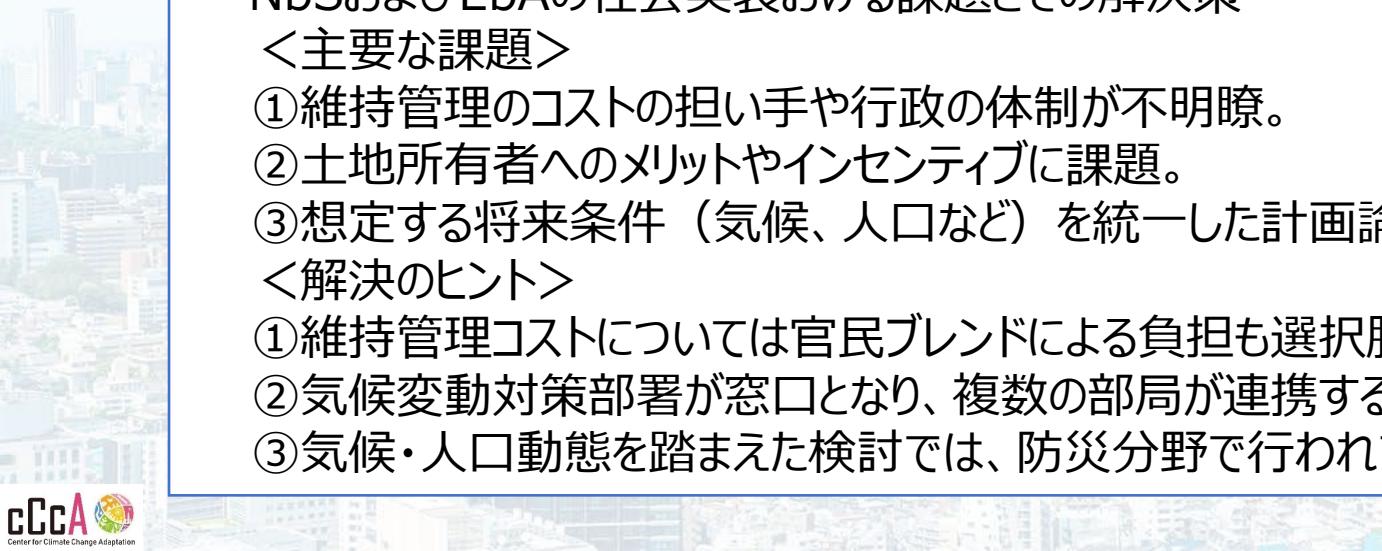
- ①維持管理のコストの担い手や行政の体制が不明瞭。
- ②土地所有者へのメリットやインセンティブに課題。
- ③想定する将来条件（気候、人口など）を統一した計画論が必要ではないか。

＜解決のヒント＞

- ①維持管理コストについては官民ブレンドによる負担も選択肢の一つ。
- ②気候変動対策部署が窓口となり、複数の部局が連携する体制を整える。
- ③気候・人口動態を踏まえた検討では、防災分野で行われてきたアプローチが参考になる。



ディスカッションの様子



1. 分科会活動の背景・目的

- 昨年度の研究会のポスターセッション形式は国研/LCCAC参加者ともに概ね好評だった。
- 今年度も情報共有・対話をメインとした活動としていく

2. 令和6年度の活動

- ① 気候変動適応セミナー「熱中症対策」での情報提供（令和6年7月22日）
- ② 暑熱・健康・都市分野におけるLCCACの取組に関するアンケート
- ③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）

1. 研究紹介

谷川 寛樹 教授（名古屋大学）、徐 非凡 准教授（名古屋大学）

2. 事例紹介 -フラッシュトーク形式-

高橋 一之氏（東京都LCCAC）、梅本 敬史氏（おおさかLCCAC）

上田 啓瑚氏（防災科学技術研究所）、真砂 佳史（国立環境研究所）

3. ポスターセッション

4. アンケート結果共有、まとめ

* 分科会はクローズドで実施中（資料公開なし）

分科会の開催概要 【暑熱・健康・都市分科会②】

19

① 気候変動適応セミナー「熱中症対策」での情報提供（令和6年7月22日）

■ プログラム

No	講演内容	登壇者
1	熱中症に関する取組	環境省 環境保健部 企画課 热中症対策室
2	ERCA熱中症対策実施状況	環境再生保全機構
質疑		
3	猛暑日の変化 これまでとこれから	東京大学 大気海洋研究所 気候システム研究系 准教授 今田 由紀子氏
4	熱中症の適応政策のデザインと評価について	京都大学 大学院医学研究科 教授 西浦 博氏
5	気候変動や極端高温が熱中症に及ぼす影響と適応策に関する研究	国立環境研究所 気候変動適応センター 気候変動 影響観測研究室 室長 岡 和孝
質疑		
休憩		
6	パネルディスカッション	

話題提供

- 静岡県環境衛生科学研究所 環境科学部（静岡県気候変動適応センター） 主査 神谷 貴文氏

パネラー

- 東京大学 今田 由紀子氏
- 京都大学 西浦 博氏
- 国立環境研究所 岡 和孝

モダレーター

- 国立環境研究所 気候変動適応センター 気候変動適応チーフコーディネーター 阿久津 正浩

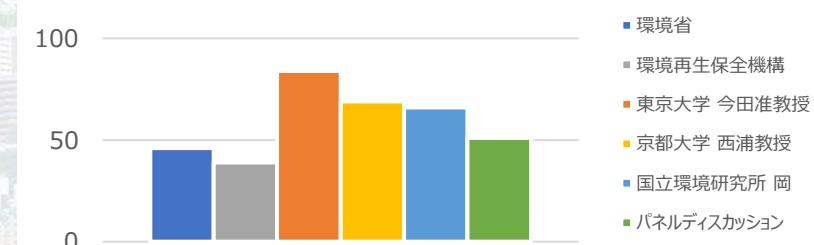
目的

- 熱中症対策に関する行政の取組および研究動向（猛暑日の将来予測、疫学的研究など）の共有。
- LCCACなどの現場での課題解決の取組につなげる。

議論、参加者からの感想など

- 熱中症警戒アラート等で現時点で身を守る対策と併せ、将来、更に気温が上がることを見据えた取組が必要。
- 移動手段の無い高齢者の避難方法など、**地域の実情に応じた対策**を考える必要がある。
- 行動制限によって救急搬送者数を減らすことは可能かもしれないが、**それに伴う影響と代替案**も含めて考えるべきだ。
- エアコンの活用を促す効果的な方法など、**行動変容に繋げるための具体的な方法**が分かると業務の参考になる。

参考になった講演 ※複数回答可 (N = 132)



② 暑熱・健康・都市分野におけるLCCACの取組に関するアンケート

LCCACの取組内容・課題など

- LCCACの取組としては暑熱（熱中症）対策に関するものが大半を占める。
- 蓄積され続けていくデータ（温湿度、WBGT値など）の活用と施策反映のために、技術的支援や事例共有の体制が必要。
- イベントや小中学校での普及啓発には取り組んでいるが、高齢者への情報伝達が不十分。
- 暑さに慣れていない地域における効果的な暑熱対策の進め方が知りたい。
- 热帯夜における就寝中のエアコン常時利用など、エアコンの適切利用に関する啓発アイデアを知りたい。
- 热中症搬送者数などは毎年の暑熱環境の違いにより変動する。普及啓発の取組によって行動変容に至った人数の把握など、効果の定量評価ができるようになると良い。

③ 気候変動適応の研究会・分科会（令和6年12月17日）

研究紹介

谷川 寛樹 教授（名古屋大学）、徐 非凡 准教授（名古屋大学）

フラッシュトーク

高橋 一之氏（東京都LCCAC）、梅本 敬史氏（おおさかLCCAC）

上田 啓瑚氏（防災科学技術研究所）、真砂 佳史（国立環境研究所）

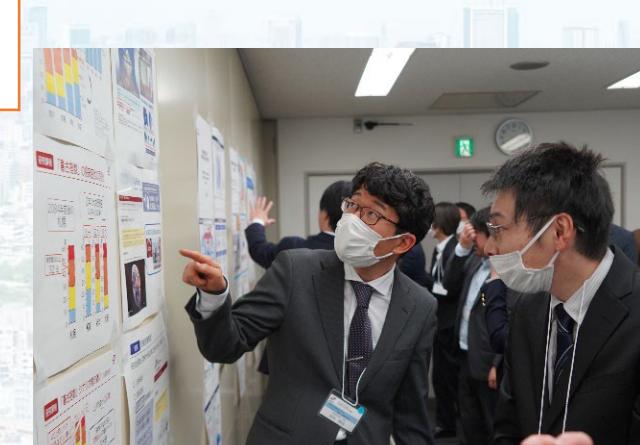
参加者

国研・大学等：38名

LCCAC：33名

関係省庁：3名

- 都市分野における研究成果（S-18）の紹介
- LCCACの取組事例（将来のWBGT値推定、暑熱対策の実例など）、防災ツール（地域防災web）、次期環境研究総合推進費テーマ等の共有（フラッシュトーク）。
- ポスターセッションによる参加者間での自由な意見交換・交流。



ポスターセッションの様子

分科会の構成・実施体制（令和6～7年度）

- 4分科会体制で実施。
- 各分科会に座長を置き、事務局は国環研が担当する。
- 活動期間：2年間

R8年度以降の活動については、座長等とご相談の上、R7実務者会合で議論予定。

分科会	座長	所属
暑熱・健康・都市	高根雄也	産業技術総合研究所
農林水産業	長谷川利拡	農研機構
NbSと気候変動適応	西廣淳	国立環境研究所
気候データ・シナリオ	足立幸穂、仲江川敏之	理化学研究所、気象研究所

想定される分科会の実施スタイルの例

- 情報交換型（話題提供および参加者どうしでの自由な意見交換）
- 課題解決型（課題を設定し、主に分科会内で議論と調査を行い、解決策を提言することなどを模索）
- 共同研究型（取り組むべき課題を研究計画に収れんさせ、外部競争的資金の獲得や共同事業への発展などを模索）